

各位

党派を超えて国家的課題を追求する

公益財団法人協和協会

時代を刷新する会

両団体会長代行 岸 信 夫
両団体理事長 半田 晴 久
環境技術委員長 坂本 忠 彦
両団体専務理事 清原 淳 平

環境技術委員会のお知らせ (第363回)

日時 令和元年11月20日(水) 午後1時半～4時

場所 参議院議員会館 地下1階 B105会議室

千代田区永田町2-1-1

◆国会議事堂前駅(丸の内線・千代田線)①番出口より5分、永田町駅(有楽町線・半蔵門線)①番出口より下車2分。当日、午後1時より、議員会館玄関にて、通行証を差し上げます。その時刻前に到着された方は、恐縮ですが、受付脇のロビーにてお待ち下さい。会議開始後にお越しの方は、受付に「B105会議室に行きたい」旨お伝え下されば、お迎えに参ります。

議題 1、「環境問題について、昨今、想うこと」

挨拶 坂本忠彦環境技術委員長

2、CO₂を原料とするプラスチックについて

解説 湯川英明CO₂資源化研究所代表取締役社長

3、『環境技術関連ニュースNO.184』

解説 中島稔科学技術部会長

報告 去る10月23日開催の第362回環境技術委員会は、坂本忠彦環境技術委員長が議長を務め行われました。まず、坂本委員長より「環境問題について、昨今、想うこと」と題して開会挨拶がありました。台風15号に続き、台風19号が甚大な被害をもたらした。私は建設省時代に治水事業に携わったが、ダムや堤防を作る計画を住民に説明すると、「そんな大雨が降るはずがない。無駄だ。」などと反対され、苦労した。今回の台風によって、観測史上最多の雨量を更新した地点がかなりあった。想定外という言葉は災害対策には当てはまらない。治水事業の大切さを改めて痛感した。また、洪水によって木材やプラ

スチックが河口に打ち上げられている。これらが海洋へ流出すると、環境にさらなる影響を与える。プラスチックの使用量を減らすとともに、分解するプラスチックの開発にも取り組まねばならない。

次に、清原淳平専務理事より粕谷健一群馬大学大学院理工学府教授の経歴紹介がありました。次に、粕谷教授より、『海洋ごみ問題に資する生分解性プラスチック』について解説がありました。生分解性プラスチックは、自然に分解するプラスチックのことで、植物から作るバイオマスプラスチックとは違う。海洋ごみで最も厄介なのは漁網である。引き上げる魚の重みに耐えるため、強靱に作られているため、海洋投棄されると厄介だ。使用中は強靱だが、使用後は直ちに分解する性質のプラスチックを研究し、時限生分解性プラスチックに行きついた。外部からの刺激により、分解する仕組みである。例えば、休眠微生物を埋め込み、分解させたいときに傷をつけて微生物が外部に露出することによって分解するプラスチックがある。食品には使えないが農業用プランターへの利用を考えている。次に、微生物は嫌気性が多いことを利用し、漁網が漂っているうちに海底に沈み、酸素の少ない海底で分解が始まるという仕組みを考えている。もう一つは、-60℃で融解する性質を持ったプラスチックを少量埋め込む。海洋中にはこの性質のプラスチックを分解する性質を持った微生物が多いので、海洋に沈めば微生物がプラスチックをエサにして分解するという仕組みである。

次に、中島稔科学技術部会長より、『環境技術関連ニュース No.183』の解説がありました。今回は、○小積乱雲が増加すると宇宙に熱を逃しにくくなり、温暖化の進行が早まるという研究結果。○国連の気候行動サミットでは排出量1位の中国、3位のインドは削減の道筋を示さず、2位の米や日本は登壇せず。○海水温が局地的に異常に高くなる現象が海洋生物や漁業に悪影響を与えている。○生分解性プラスチック100%のボトル開発。○G20海洋プラ削減技術で促進で合意も中国は不参加。○気候変動によって土壌の水分吸収量も低下か。などの解説があり、一同大いに勉強になりました。

★レクチュアにつき、当日会費千円にご協力をお願い申し上げます。

次回、11月20日(水)の環境技術委員会に

出・欠 (いずれかに○印)

御芳名 _____

貴方様のFAX _____

テロ対策への警備からの要請上、会員に限ります。

非会員で参加希望者は、2日前までに履歴書をご提出下さい。

(その際の当日会費は二千円となります。)

事務局宛FAX 03-3507-8587

公益財団法人協和協会 03-3581-1192 時代を刷新する会 03-3272-4320

ホームページ <http://www.kyowakyokai.or.jp> Eメール shigeta@jidaisassin.jp